

龍馬問題 1

(や＝山田 学) [☆★龍馬問題★☆☆わたしは数年前から少しづつ「矛盾の解決・龍馬問題」といふことにも取り組んできました。龍馬問題については名探偵諸氏が登場してきてをり、諸視点の矛盾を解決していきたい、と考へたからです。日本皇族の内実、英国外交の真実、龍馬の情報戦基地、東北地方の動き、米国外交の関与。これらのはざまにこそ、龍馬はみましたから、以下、かなり迂遠な解説にもおつきあひください。

◇◆(1)落合秘史◇◆

意表をつく、日本民族の国家の中世からの内実伝統について、今、意図的に封印が解かれつつあるやうです。それを公刊しつつあるのが、落合莞爾氏による「落合秘史」シリーズ(成甲書房)です。落合氏は、現在人たる「京都皇統代」なるお方からの内実断片的情報を間接的に得つつ、推理・執筆・公刊してあます。その要点を解説しませう。

この封印解きの基本は、中世の皇族の内密新制度にある。武家(足利氏)をよそに、南朝北朝皇族の秘密談合があつた。かの南朝・後醍醐天皇の息子・大塔宮護良親王の息子に、ある養子縁組があつた。この実子の末裔の代々当主を伏見殿と呼ぶことになつたのである。代々の伏見殿は、永世の天皇候補の親王である。これは皇統断絶を防ぐための新制度

であり、また、内密のひろく国際的な業務なども担当しつづけてきた。第102代後花園天皇こそは、いよいよ、伏見宮家から出た天皇であり、当代以降すべての天皇が、実は南朝・後醍醐天皇の末裔なのである。幕末の伏見殿たる邦家親王が、武家(幕藩体制)をよそに、一定の封印解きの南朝復権運動を、上から指示したのである。ここに、尊皇攘夷と南朝復権が結びつく理由があるのである。表向き攘夷風であつた孝明天皇が「北朝」であつたら、南朝復権運動(1850年佐賀藩楠公義祭同盟など)が、尊皇となるはずがない。ただし一方、伏見殿は代々、内密の国際業務も担当してきたから、開国の必至性を幕末においてもっともよく理解する日本民族の人格だつたのである。まづ南朝復権(尊皇攘夷)、一定の成果をみてから、なるべくなめらかに尊皇開国へ。かういふ指示と設計と実行が、実は上から意図的になされたのである。だからこそ、日本民族の国家は、人間社会史上まれな、わりと平和な体制移行ができた。龍馬一個人の人格と能力のゆゑなどではないのである。「落合秘史」の具体論については、後述します。

◇◆(2)フリーメイソン◇◆

次に、加治将一氏の『龍馬の黒幕明治維新と英国諜報部、そしてフリーメイソン』(祥伝社文庫2009年)といふ著作があります。副題に違和感のある方もをられるかもしれません。まづここで、噂の「Freemason」とは何か、少し考へてみませう。

語源的には「特権的石工」のやうです。当初は、あるいは、古代エジプトからの、少なくとも中世ヨーロッパからの、〈土木建築技術・技能者秘伝連帯〉といったもののやうです。そしてしだいに、十字軍、商業金融、宗教改革、近代科学、革命支援、王室連合など、これらが浸透してきたやうです。わが日本民族の一部においては、それらについては「尊皇攘夷」的にさまざまに警戒し憶測してきたやうです。そろそろそれは欧米史などの事実であると冷静に理解していく。そして、ならばあらためて日本民族としてどう対応していくか、あるいは、日本民族的なまうひとつの交流や組織をどう実現していけるか。かういふ判断も、必要でせう。

わたしの見解ですが、「自由・平等・友愛」といふよりは、〈健康平和な現実認識の分業と協業としての平等社会〉を追求したいです。また、日本民族文化と歴史学について、かう考へます。神武天皇伝説の奥にどういふ歴史事実があつたかなかつたかは、歴史学の問題ですが、神武天皇伝説があることは、厳然たる事実です。たとへ共同幻想と言はれようと、この伝説じたいを尊重することも、重要な日本民族文化です。この伝説の奥にどういふ歴史事実があつたかなかつたか、健康平和な現実認識の歴史学も発達すれば、なほよいです。西欧の実証精神の参加です。

『龍馬の黒幕』は、アメリカ独立戦争やフランス革命などにおいて、フリーメイソンが革命支援した事実から、では、わが幕末・維新

の内実はどうか、といふ問ひかけから調査・推理・執筆されました。この問ひかけの範囲においては、緻密な推理です。が、後述する他の名探偵諸氏の視点が欠けてある、といふ意味においては一面的でせう。この著作の本文末尾に、著者の訴へがあります。まづ当時の英国外務次官から在日英国公使への公文書を示しますが、これは、英国の熟練外交として、誇り高き日本人に対する秘密工作について、幾度も釘を刺したうちの一例です。]

(『龍馬の黒幕』401 ペより) [「日本において、体制の変化が起きているとすれば、それは日本人だけから端を発しているように見えなければならない」(一八六六年四月二十六日、ハモンド外務次官からパークス在日公使宛公文書)

この台詞は、植民地支配を重ね、他国の革命にからんできた者だけが知る台詞である。すなわち英国は征服より経済成長を促した方が得られるものが多いということを理解しているのである。]

(や) [◇◆(3)構築者◇◆◇

いつたん加治説を離れます。ただの破壊者でなく、構築者たらんとした龍馬において、新国家根幹方針はどのやうに形成されたか。よく指摘されるのは、土佐の(河田小 龍も介し)ジョン万次郎、江戸の佐久間象山塾、長崎のグラバーとアーネスト・サトウらからの影響などです。が、まだ見落されがちなのは、日本民族内部からの要因です。ちなみに、龍馬没後だが、「五箇条の御誓文」に、聖徳太子

の十七条憲法からの影響も考へられます。

まづ龍馬の世界観は、土佐の風土と北辰一刀流千葉道場からの、「北辰妙見菩薩」といふ北極星信仰でした。太古のかなりひろい地域にあつた信仰と仏教の習合です。平野貞夫・千葉吉胤妙星『坂本龍馬と謎の北極星信仰』(小学館 2010 年) といふ著作があります。平野貞夫氏は、ご自身が土佐生れ、衆議院事務局出身、小沢一郎氏側近の国会議員でした。千葉吉胤妙星氏は、「千葉氏家伝の妙見兵法桓武月辰流第 24 代宗家」です。この著は、形式は平野氏の手になるが、内容は共著です。]

(『... 北極星信仰』88 ~ 89 ペより) [... 妙見信仰では、北極星の下、すべては平等である。実際、千葉道場では諸藩から修行に来ている者が多数いたが、縄張りはなく、土佐のような上士も下士もない。北極星を意識し、天から世の中の動きを俯瞰して見れば、尊王攘夷か、佐幕開国かで割れる藩論がいかに不毛な議論であるか、おそらく龍馬は気づいたのだ。

日本を二分したままで、この国に未来はあるのだろうか。全国的な連帯を築かずして、近代化を為しえることはできるのだろうか。そのような思いを抱えた上で、脱藩を決意したのであろう。]

(同 92 ペより) [大胆に仮説を提唱するならば、龍馬の卓越した対人交渉力は、その人間的魅力に加え、前述の北辰一刀流の奥義の力によるところがあるのではないかと考えてくる。

千葉一族が妙見菩薩を信仰する中で具現化した、一族相伝の法術 — 「妙見法術」と言ってもよい奥義によって、相手の意識に働きかけ、改革の輪をつなげていったのではないか。]

(同 157 ペより) [日蓮宗にとって、妙見菩薩はある意味で「信仰の対象」という以上の存在になっている。日蓮宗そのものを守る神が、妙見菩薩なのだ。そのため日蓮は、千葉妙見宮(現在の千葉神社)を数年おきに必ず参詣していた。千葉妙見宮は、妙見菩薩を本尊としている。]

(や) [そして千葉周作の弟の千葉定吉道場こそは、龍馬の情報戦の基地でした。定吉の長男の重太郎と次女の佐那は同志でした。]

(同 56 ペより) [... 千葉道場の本質は、自らリクルートした多くの「スパイ」を操る諜報機関だったのである。

個人の入門者を募るだけでなく、各藩から剣術指導の委託も受けていたので、千葉道場には三〇以上の藩から武士が集まった。...]

(同 57 ペより) [... 龍馬の情報収集の面で、千葉佐那は大きな鍵を握っていた。というのも、佐那は幕臣たちに顔が利き、そのため江戸城にも出入りできたからだ。]

(同 60 ペより) [そもそも千葉道場は龍馬を社会改革に欠かせない人材だと見込んでいたし、その運動が一段落して世の中が静かになれば、正式に佐那と結婚して千葉一族の一員になると思っている。...]

(同 90 ペより) [... 一人の脱藩浪士にすぎない龍馬が、幕府の政事総裁職という重臣であり、越前藩主という雲上人に会えたのも、千葉重太郎が越前藩の剣術師範をしていた縁で龍馬を紹介したからだった。

そして、軍艦奉行並勝海舟を訪ねる。このときも千葉重太郎が同行している。]

(や) [さて、「船中八策」「新官制擬定書」「新政府綱領八策」への龍馬とまさに行動をとともにした、陸奥宗光と尾崎三良。彼らの奥にある指導系統について、「落合秘史」シリーズが重要指摘をしてみます。

基本線はかうです。

先述の伏見殿邦家親王の極秘側近が三条実萬と三条実美の父子であつた。実美は土佐藩・山内容堂の義弟であつた。これが、日本国の新体制への移行を土佐藩を支点到に調整するための、指示・連絡系統であつた。

そして、大政奉還時に京都の近江屋に龍馬と同居してみた尾崎三良(維新後、法制局長官など。尾崎行雄の義父。)は、実は、三条実美の配下でした。「新官制擬定書」は、龍馬自身でなく、三良が案を提供したやうです。その前の三良の行動日程をみると、もともとは三条実萬の案を秘めた三良が、龍馬とともに、長崎や土佐藩にて志士たちの意見も聴きつつ、京都にて提出用文書を準備した、といふことのやうです。]

(落合秘史Ⅲ『奇兵隊天皇と長州卒族の明治維新大室寅之祐はなぜ田布施にいたのか』2014年・264～265 ペより) [実萬は「今天神」

と呼ばれたほどの有職故実の大家です。大政奉還を受けた朝廷は、律令に代わる新政体の職制を考案しなければなりません。新政体は専制でなく、朝廷・公家・諸侯・士庶の各勢力が合議する公議政体と決まっていますが、そのポイントは、社会的な身分は低いながら維新に功績があった実力派の下士卒族たちと公家・諸侯が論議する場を、どのような形で設けるかということなのです。

(中略)

思うに、この時に当たり、三良が提出した新政体案の職制構想は、「今天神」と呼ばれた実萬が考えて実美に伝え、実美から、三職人事案とともに秘かに三良に渡されたものと、推察します。]

(同 198 ペより) [尾崎の案を見て、龍馬は手を叩いて喜びました。「今すぐ自分が、この案を掲げて走り回れば事は進む」と悟ったからです。...]

(や) [さて、伏見殿の息子に中川宮朝彦親王がゐります。孝明天皇の義兄です。朝彦親王は、孝明天皇や岩倉具視と組み、一方、徳川慶喜とも組み、幕末において重要な動きをしました。詳細は「落合秘史」シリーズをお読みください。

その朝彦親王の秘書が、実は、陸奥宗光と義兄の伊達宗興でした。それのみでなく、宗光の実父・伊達宗広は、紀州藩勘定奉行出身であるとともに、『大勢三転考』(1848年)の著者です。この著は、後世の東洋史学者・内藤

湖南が、「本邦史上五指に入る本格歴史書」と評したほどの水準です。]

(落合秘史Ⅳ『京都ウラ天皇と薩長新政府の暗闘明治日本はこうして創られた』2014年・128 ペより) [坂本龍馬が、文久三(一八六三)年に京都・粟田口の伊達宗広宅をしばしば訪れたのは、隠れた目的があったはずで、伊達(陸奥)宗光に接近した龍馬が、宗光を神戸操練所に同行して勝海舟のもとで学ぶのも、おそらく偶然ではありません。]

(や) [以下の文中の「魔王」は朝彦親王の尊攘派からの異名です。「大勢の四転目」は維新後の社会体制です。]

(同 89 ペより) [魔王の本拠粟田口で坂本龍馬に引き合わされた宗光は、以来龍馬が暗殺されるまで五年間も坂本龍馬に密着して片時も離れず、...]

(同 90 ペより) [... 何しろ龍馬と宗光は、粟田口青蓮院で魔王の警咳に接し、『大勢三転考』の著者伊達宗広から歴史と政治を直に教わったのですから、暇さえあれば、眼前に近づいた「大勢の四転目」の在り方を議論していたのは当然です。]

(や) [朝彦親王は中川宮の前に青蓮院宮ですが、ちなみに、龍馬の妻のお龍は、青蓮院宮家侍医の長女です。(平野貞夫『坂本龍馬の10人の女と謎の信仰』幻冬舎新書 2010年・37ペ参照) また、龍馬の幼馴染みで「恋と革命」の同志たる平井加尾も、先述の京都の三条家へ奉公に出たことがあります。(同 30～31 ペ

参照) 龍馬の情報戦においてこの2女性もどうかかはつてゐるかみないか。

◆◆(4)衝突...◆◆

次に、龍馬の悲劇につながつたと、わたしが考へる、微妙な点に踏み込みませう。

亀山社中はグラバーと小松帯刀(薩摩藩)らの支援のもと成りました。後藤象二郎がジョン万次郎らと上海視察後、土佐藩所属の海援隊が成りました。亀山社中と海援隊は、異質ではないか。亀山社中時代、隊員の近藤長次郎が小松とグラバーにイギリス単身密航を頼んだ。これは亀山社中規定違反であり、龍馬は近藤を切腹させた。英国人グラバーの死生観や革命支援観と、日本民族龍馬の結社観や死生観が、衝突したのではないか。(加治『龍馬の黒幕』375～376 ペ参照) 他方、倒幕などではない、海援隊長・龍馬の強い意思について、かういふ指摘があります。]

(平野・千葉『... 北極星信仰』102～106 ペより) [... 海援隊の結成から三か月後に起きたのが「いろは丸事件」だ。海援隊の蒸気船いろは丸が、紀州藩の明光丸と衝突して沈没した。

(中略)

... 龍馬は元治元年(一八六四年)から三年のあいだに、北海道開拓移住計画を二度にわたって構想している。

(中略)

「蝦夷地に新しい国家を開こうとするのは、私の一生の念願です。一人でもやり遂げたいと思っております」 そんな意味のこと

を、龍馬は書いているのである。

その二度目の北海道開拓計画を実行するために乗り込んだのが、先に紹介した「いろは丸」だった。(中略)

しかしその後も、龍馬は北海道行きを考えていた。妻のお龍にも北海道で暮らすことを語り、お龍もそのつもりで北海道の言葉を稽古していたという。...]

(や)[こんな龍馬を倒幕活動に組み込みたい、とともに、紀州徳川家を弱らせた。武力倒幕派のそんな意思が、陸奥宗光(紀州藩出身)も介し、「いろは丸事件」と事後の巨額賠償請求を結果した。さういふ推理も可能でせうか。

なほ、維新後のことだが、北海道については、かういふ指摘もあります。文中の「小栗」については、後述します。]

(落合莞爾・斎藤充功『明治天皇“すり替え”説の真相近代史最大の謎にして、最大のタブー』学研パブリッシング 2014年・259 ペより落合氏の発言) [... 小栗の亡命先のフィラデルフィアはアヘン取引の中心地です。アヘンと黄金は経済的に密接な関係があり、小栗の亡命と「在米三井物産」の創立はこれと関係しています。

そして北海道は罌粟の産地で、またマサチューセッツ農大のウィリアム・スミス・クラークを明治九年に札幌農学校の教頭として招聘したのも、北海道が罌粟の産地となることと深く関係していたと聞きます。明治二十二年の吉野の大水害で水没し

た奈良県十津川村民が移住して、罌粟の栽培に当りました。]

(や)[今の定説では、幕府の重要奉行であつた小栗忠順は、官軍側が1868年に小栗を処刑し「あの世」へ追ひやりそれもあり幕府解体となつた、です。が、「落合秘史」の重要部分として、これは偽装処刑であり、実は伏見殿や岩倉具視らが設計し、小栗を「あの世」ならぬ米国フィラデルフィアへ追ひやつた(亡命させた)、といふ説です。

一方、米国と言へば、想起されるのがジョン万次郎。かういふ指摘もあります。]

(副島隆彦・SNSI 副島国家戦略研究所『フリーメイソン＝ユニテリアン教会が明治日本を動かした』成甲書房 2014年・67 ペより副島氏の発言) [... ジョン万次郎が、ただの土佐(高知県)の漂流漁民であつたか、今となつては極めて怪しい。

ジョン万次郎は、計画的に始めからアメリカ政府によって育成され、そして日本に送り返された特殊な人物である。土佐藩はアメリカの捕鯨船団ともつながり密貿易をしていたはずだ。幕末の日本の(のちの)指導者たちは、勝海舟、坂本龍馬、福澤諭吉をはじめとして、「ジョン万次郎が作った秘密のネットワーク」で動いている。...]

(や)[ありうる。とわたしは判断します。それで調査不足のわたしの関心は、小栗と万次郎が、間接的にか直接的にか、どう連絡があつたかなかつたか、です。

土佐藩の龍馬と海援隊において、英国の利害

と米国の利害が衝突してはみないでせうか。これに関し、わたしは当時の東北地方の動きが気になります。また少し迂遠な解説におつきあひください。

◇◆(5)皇統◇◆◇

高橋五郎氏の「封印された南朝皇統と『天皇の金塊』の謎」(学研パブリッシング『ムー』2014年6月号 No.403 所収) といふ記事があります。

この内容に言及する準備としてまづ、噂の明治天皇すり替へ説について、考へませう。「落合秘史」は以下の立場であり、わたしも賛成します。

長州・奇兵隊の^{おほむろとらのすけ}大室寅之祐が、睦仁親王(孝明天皇の実子) とすり替へられ、公式に明治天皇となつた。が、孝明天皇も、実子の睦仁親王も、殺されてはをらず、維新後、水面下において、それまでの伏見殿の活動を継承し、「京都皇統」となつた。

実は、幕末のいくつかの藩において、もしも自藩が中心となり天下をとつたら、自前の天皇を立てる、といふ準備がありました。むろん、皇族についての家系をそれなりに検討した上においてです。まづ、先述の護良親王の末裔として、長州藩の大室天皇、紀州藩の井口氏、第99代後龜山天皇(護良親王の甥)の末裔として、仙台藩の小野寺氏、水戸藩の熊沢^{たかなが}天皇、紀州藩の朝里氏、尊良親王(護良親王の兄)の末裔として、井伊藩の三浦天皇、などです。

このうち、長州藩の大室天皇が、伏見殿と同

じく、護良親王直系であること、南朝復権運動や、長州藩などの人権問題(不満解消)、英国の革命支援観から「御しやすい」人格、などの要因が合致し、新国家天皇として、上記のすり替へが、秘密の平和裡においてあつたやうです。

ここで、幕末(および現在といふ転換期)において再び登場したのが、仙台藩の小野寺氏です。その報告が、先の高橋氏の記事です。わたしはこの記事内容にほぼ賛成しますが、噂の「日ユ同祖論」も少し浸透してゐるやうで、その点は検討課題です。「日ユ同祖論」についてまづ、次の引用をしておきます。]

(小池壮彦『怪奇事件の謎』学研パブリッシング MU NONFIX・2014年内「伊勢神宮参拝という“踏み絵”」187～189 ペより)

[... 皇室には古くからユダヤ王家との親近性を語る伝承があつたようだが、古いと言っても日本人のユダヤ起源説が盛んになるのは明治時代以後のことである。明治政府が欧州資本との蜜月関係を築いたこともあって“日ユ同祖論”が支配層の間でも話題になつたのだ。

(中略)

いずれにしても、この問題の性格というのは、真実の追究よりも、何を真実と見せかけておくのが得策かという政治的擬制に尽きている。...]

(や) [今の定説にもある「戊辰戦争時の奥羽越列藩同盟」の奥に、実は、仙台藩の小野寺氏といふ新天皇運動があり、米国などはそれ

を注視してをり、小野寺氏末裔が現在においてそれを証言した。この当時の事件の封印を解くことが、今も噂の「天皇の金塊」について解明していくための基礎である。これが高橋氏の記事内容の要点です。(別情報によると、証言した小野寺氏末裔は横浜市在住。)]

(高橋記事 17 ペより) [たとえば明治元(1868)年10月18日付の「ニューヨーク・タイムズ」紙は、「日本にはふたりの天皇がいる」という特派員の記事を掲載している。また当時の米国公使ロバート・ヴァン・ヴォールクンバーグは本国への報告の中で、「いまや日本にはひとりの将軍に代わってふたりのミカドがいる」と書き送り、外交交渉はどちらのミカドと行うべきかと相談している。]

(や) [幕府の小栗奉行が指示して購入した米国の甲鉄艦を、米国は官軍・幕軍のどちらにも引き渡さず、戊辰戦争決着まで局外中立を宣言したことと、関係するでせうか。

さて、次の「南朝の皇統」とは小野寺氏をさします。幕末1864年以前についてです。]

(同 30～31 ペより) [このとき南朝の皇統の座には後に^{ちとくいん}知徳院となる大政天皇が就いていた。大政天皇は、三超院以来の幕府の弾圧を逃れるため、駿東や江戸の上野に隠棲していたが「時、至れり」との決意を抱き、供の者を連れて京を目指す。

この上洛の際、案内役として同行したのが平岡円四郎である。

平岡円四郎は15代将軍徳川慶喜側用人と^{よしのぶ}

して活躍。慶喜が徳川家茂いえもちの後見役となった際には、世間から「天下を動かしているのは一橋慶喜、慶喜を動かしているのは用人平岡円四郎」とまで噂された切れ者である。

平岡円四郎は千福屋形小野寺氏の遠縁に当たり、大政天皇の唱える開国・和平・通商の思想に深く共鳴。一足早く京都へ入り、南朝皇統とその開国思想を支持する人々と連絡を取ろうとしていた。

ところが、元治元(1864)年2月16日の夜、平岡円四郎は攘夷派の水戸藩士らにより暗殺されてしまう。

(中略) 大政天皇の一行は、一路、東北の仙台藩を目指し出立した。

仙台藩主・伊達慶邦えんじゆいんの生母・延寿院は、大政天皇の母・貞操院ていそういんの妹にあたる。つまり叔母・甥の関係である。その縁を頼っての仙台入りであった。

(中略)

薩長同盟が後押しする北朝の血を引く明治天皇。そして仙台藩を中心に東北諸藩が担ぐ南朝皇統の大政天皇。本来ならばこのふたりの天皇が、幕末の南北朝ともいべき歴史の動乱の勢力を二分するはずであった。

ところがここにもうひとり、また天皇を自稱する人物が登場。これにより事態は収拾のつかぬ混乱に陥ってしまうのである。

その人物とは輪王寺宮りんのおうじのみやとして知られるきたしらかわのみやよしひさしのう北白川宮能久親王である。輪王寺宮は伏

見宮邦家親王の子であり、...

(中略)

...そして輪王寺宮は「われこそ正しき天皇なり」と称し、「官軍討つべし」の檄を諸侯に飛ばしたのである。

東北の諸藩は動揺した。

仙台藩が担ぐのは南朝皇統の大政天皇。一方、会津藩に逃げこんできた輪王寺宮は、一応形のうえでは孝明天皇こうめいの弟にあたる人物である。

どちらに就けばいいのか。

(中略)

当然、仙台藩伊達氏の求心力は弱まっていた。結成当初、一枚岩を誇っていた奥羽越列藩同盟は信頼関係にひびが入り、もろくも瓦解していくのである。]

(や) [これはおそらく、さしあたり日本民族を二分しないため、東北地方を弱めた、伏見殿邦家親王の謀略でせう。輪王寺宮登場の前年夏から、英国が軍艦にて東北地方沿岸をなめるやうに恫喝してまはつたこととも、つながるでせう。

伏見殿による一定の封印解きをも超える事態が、東北地方に生じました。以下は、維新後新政府の心情についての記述です。]

(同 34 ~ 35 ペより) [もうひとりの天皇がいた、という歴史的事実は、どのような手段を用いようと絶対に封じなければいけない。一刻も早く暗黒の墨で塗りつぶさねばならぬ、真に恐るべき脅威であった。]

(や) [戊辰戦争時に朝廷は、心情の問題とし

て何をしたか。「陸奥出羽むつではの賊徒」などは、12世紀崇徳院の怨霊のたたりと想ひ、崇徳院の命日に鎮魂の儀式を行ひ、一連の儀式を済ませてからはじめて、新天皇は元号を明治と改めました。とにかく、当時の朝廷の世界観(心情)として、激烈な問題でした。この鎮魂の事実は、井沢元彦氏『逆説の日本史』連載第1030回(週刊ポスト2014年7月11日号)を参照しました。

実は幕末の小野寺氏には豊かな財力があり、それに海外の資本家たちが新しいジパング伝説として目の色を変へたのですが、伏見殿・孝明天皇・明治天皇・新政府としては、皇統問題として、小野寺氏の存在じたいと財力を認可できず、深く悩まされました。1911(明治44)年帝国議会決議「皇統は南朝をもつて正統と為す。」以降のことです。]

(高橋記事 37 ペより) [明治政府も天皇も、ここに進退窮まった。そして恐ろしい決断へたどりつく。金がないとは絶対にいえない。ならば金を作るしかない。だれにも知られぬよう外国から金をかき集めるのだ。

「天皇の金塊」はそのようにして産みだされた。

明治が終わると、日本は凄まじい勢いで外国を侵略しはじめた。...

(中略)

...「天皇の金塊」の秘密を完全に解明し、日本近代の歩みを再検証するためには、南朝皇統がいまも存続していることを世間に認知させ、「もうひとりの天皇」を歴史の

表舞台に再登場させることが、まず必要といふことになる。]

(や)〔北海道まで意識してみた龍馬は、幕末の東北地方の事態をどの程度知り、どう対応してみたのでせうか。勝海舟は、どうか。米国帰りのジョン万次郎は、どうか。〕

なほ、小野寺氏の神道は、日蓮宗と習合してゐます。

また、北辰一刀流の千葉周作も、「岩手県気仙村」に生れ、「宮城の古川」にて幼少期を過しました。(平野『...10人の女...』73 ぺ参照)

◇◆(6)天秤◇◆◇

いよいよ、龍馬暗殺問題。

加治将一説において、正しいとわたしが考へるのは、英国公使パークスのあり方です。

パークスは、英国の熟練外交観から、幕府と協調する形式を保ちつつ、武器商グラバーの武力革命支援観を促進する内容、これを実行したやうです。龍馬は、英国流の形式と内容の表裏を、見抜けただらうか。

大政奉還といふ名目大奉還後も、まだ幕府権力にある人事と経理を新体制へどう移行させるか、だれだれがどう対話するかしないか、一定の実力行使をどうするかしないか。対立点は複雑にありました。「北辰妙見菩薩」のもとキリスト教を警戒した龍馬は、なるべく平和な対話路線を追求したやうです。徳川慶喜や勝海舟とも調和しようとしたやうです。が、薩土盟約と表裏の薩土密約にもとづく武闘組織たる陸援隊と、接触・衝突したやうで

す。ちなみに、事後、海援隊とグラバー商会も基礎として、三菱財閥が興りました。

龍馬暗殺は、組織的計画的でせう。アーネスト・サトウや、大久保利通、岩倉具視など、武力倒幕派からの示唆や指示や設計があつたのでせう。吉井友実(サトウと内通)や陸奥宗光なども介在したのでせう。実行犯についても、加治説が正しいと、わたしは考へます。すなはち、意外にも、中岡慎太郎(陸援隊長)、田中光頭(陸援隊)、谷干城(土佐藩)の3名。陸援隊の敵たる、新撰組やら見廻組やらを疑はせ、さうして内実を封印するための演出も、あらかじめしたのでせう。伊東甲子太郎といふ千葉道場関係者も、設計に組み込まれてみたでせうか。千葉家としても、家人のみに免許される秘伝の法術を活用しつつ、家人(佐那と結婚)からはみ出しがちな龍馬に、対応する必要があつたでせうか。

龍馬の信仰について、わたしも気になる次の意見を、引用しておきます。]

(平野『...10人の女...』205 ぺより)〔明治時代となって、なぜ妙見信仰が消えていったのか。廃仏毀釈のせいだけではないと思う。むしろ明治官僚国家体制が確立していくなかで、妙見信仰が封印されたのだと思う。幕末、坂本龍馬は北辰一刀流の「妙見の法力」を修得し、民衆の解放を目指したが、これを封印する必要があつたのではないか。龍馬暗殺の隠れた理由はここにあると思うが、真実はこれからの研究を待とう。〕

(や)〔他方、龍馬において関心が深かつた、財力の幕府から新体制への移行と、武力倒幕資金などをめぐり、調和できぬ対立もあつたのでせうか。〕

先述したやう、伏見殿は、日本国の新体制への移行を土佐藩を支点到に調整しました。結果、天秤の両端となつたのが、海援隊長・龍馬と陸援隊長・慎太郎の親友だつたのか。

あるいは、伝説の、「ほたえな(ふざけるな)！」の声は、龍馬から慎太郎に、「こなくそ(この野郎)！」の声は、慎太郎から龍馬に、だつたでせうか。

変革期の日本国は、俗世にとらはれない龍馬を活用し、かつ、活用しきれず封印した、といふことでせうか。

＊

龍馬問題の真相解明は、現在これからのわれわれの行動と、無関係ではありません。確かな真相解明を深めていきたいです。2020年東京オリンピック・パラリンピックも意識し、日本民族の統一と諸民族調和へのおもてなしを、どう実現してまゐりませう。]